

ヅ、奥州ニモアリ、直海氏曰、古ヨリ富士甘草トテ、富士山ヨリ出ヅト、按ズルニ今官園ニ所有ノモノ、本甲斐國ニ出ヅ、然ドモ山中多出ルコトヲ聞ズ、又其他處産スルモノ未見之、甲斐産苗ノ長二三尺、葉ハ紫藤葉ニ似テ、稍小ニシテ微毛アリ、根皮紫赤色、肉黄色ニシテ味甘シ、此物甲斐國山梨郡上於曾村伊兵衛、同郡下石盛村與兵衛園中ニアリ、其始所出未詳、或云、甲斐深山中ヨリ出ヅ、或云、武田信玄漢土ヨリ得テ植ルモノ、今尙存スト、何レカ是ナルコトヲ知ズ、享保中阿部將翁軒、台命ヲ奉ジテ、甲斐國ニ至テ是ヲ得タリ、今東都及駿府官園ニアルモノ是ナリ、駿府ニテハ甚繁茂ス、東都ニテハ繁茂セズ、戸田先生非藥選曰、一種稱南京様者、御園之種而人間幾希ト、今官園ニ此種ナシ、又甘草苗漢土ニ徴スコトヲ聞ズ、

〔草木育種藥下品〕甘草本草

和名抄にあまきと云、本甲斐國に甘草あり、今又二種あり、葉小く圓して、

根横に延ざるもの上品にして、南京種に近し、一種は葉紫藤に似て小く、根細くして蔓の如節々より芽を生ずるもの、是福州種なるべし、ともに三月頃芽出ざる時、掘て節を籠て三四寸ぐらゐに切て、山の締たる赤土を深堀、右の根をはすに栽、よく根廻を踏かためてよし、土柔なれば腐ものなり、少しづつ、肥土をませて植べし、

〔延喜式三十七諸國進年料雜藥典藥〕

常陸國廿五種略○中 甘草廿五斤十三兩、陸奥國六種、甘草十斤、出羽國二種、甘草五斤、

〔採藥使記下甲州〕照任曰、甲州石部ト云フ所ヨリ甘草ヲ出ス、又ヲリト云フ所ニモアリ、二種アリ、即チ獻上ス、

重康曰、甲州石森村ヨリ甘草ヲ出ス、又打栗ト云フ所ニモアリ、土人ノ曰昔ヨリアリテ甲州ノ名物ナリト云ヘリ、

重康曰、甲州栗林村ト云フ所ニ、土甘草ト云フ物アリ、多ク楮木ノ林ノ中ニ生ズ、土人呼テクヌギ